

萱

2021・1

風萱集

亀田虎童子

筋書のなきが遊びや寒雀
物言うて横向く男秋灯
悪夢とは言ひかねるなり俄か寒
すずめ蜂笑はれるほど恐れけり
二枚舌その夜の寒さつのりたる

松下 道臣

横がほのきりりとなりし稲光
秋日傘くるりとまはす立ち話
生身魂話半ばで居眠りす
洋梨のどつしりしたるおぬどかな
噛み切れぬものを呑みこむ終戦日

小島 良子

和紙の白洋紙の白や十一月
鳴り終へし鐘青銅の冷たさに
短日や表も裏も鯨幕
日の丸の丸の残像文化の日
雁渡るいくたびわが名記せしや

出牛 進

花糸瓜色に始まる立ち話
秋の夜の朗読で聴く三四郎
寒暁のコップの水の固きかな
マスクして手拍子打つて熊手かな
小春日や祭りを知らず砲の音



萱集

進選

つながれて子豚の散歩木の実落つ
溝蕎麦やせせらぎ和して野をくだる
はるかなる記憶の底ひうろこ雲
閉ざされし放流ゲート秋深む
小春日や頬杖かへてパズル解く

埼玉 鈴木 愛子

一葉もお関も強し十三夜
葉牡丹やいま晩節の安らけし
この池にうから待つのか渡り鴨
雑踏に若き日の彼冬夕焼け
憎まれ口たたき叩かれおでん鍋

千葉 中山 恵子

孫のこと子のこと妻と夜長かな
岩白き大田切川秋の風
天高し手紙書きたくなりにつけり
秋霖や更地のままに床屋跡
黄落に見紛ふごとき秋の蝶

東京 ふなかわのりひと

みちのくの浄土の池に憩ふ雁
稲^{いな}棒^{ぼう}塚^{づち}北の守りの如く立つ
流水の忽然と消え冬の川
観音の里の巡礼伊香しぐれ
秋日和果物箱の秀の文字

埼玉 新沢 伸夫

鴨来る散歩楽しむ十五分
孤食にも馴れて一年十二月
浄水の泡の向こうに鴨の陣
ケアマネに柄物マスク似合ひけり
枯蓮田手入れに入る男振り

東京 飯塚トシ子

残照の法科やいちよう散りやまず
雨な降りそ遠出久しき紅葉狩
読書週間古りて短き栞ひも
武蔵野やもみぢを急ぐ草と樹と
総身打つ落葉間遠なバスを待ち

東京 武田 未有

降り風ぎて累々たるや破芭蕉
追憶と己の影と椎拾ふ
新米やうすかすみたる目鼻立ち
かぎろへば蓮の実飛びて舟べりに
渋柿や病窓占めてひそまりぬ

東京 根来 隆元

炎暑なりデコラの卓に水こぼれ 奥坂 まや

「俳句四季」十月号

令和二年の梅雨は長く、夏は猛暑が続いた。国の新型コロナウイルス対策は混乱し、私達は不安な日を重ねた。そんな夏、デコラの卓に水がこぼれた。デコラとはメラニン樹脂を張った化粧版のことで、これは商品名なのだそうだ。コップでも倒れたのだろうか、こぼれた水は卓に浸みることもなくつるつるした表面に水のまま。卓も水も互いに関わり合わない。これは炎暑の何か非情な感覚と思う。

鉄板に鉄板重ね日の盛 まや

クレーンに吊り上げられた鉄板が地上に寝かされ、その上にまた鉄板の重なるような場面か。鬱然とした日盛りである。

銃声を誘ふごとき夕焼なり まや

夕焼といえば「歩を進めがたしや天地夕焼て山口誓子」を思う。「遠星」の中の昭和二十年六月の日付入りの一句。日本が絶望的な戦いを続けていた頃の作である。

掲句もさぞ壮大な夕焼であろう。天地は静寂に包まれている。しかし、完璧なものに真向う時、人はそれが崩れることをふと思いえがくもの。この静かさも一発の銃声で破れるものかも知れない。危うくも得難い一瞬時である。

ここにも氏の奥行のある世界が繰り広げられている。

出撃も撃滅もなき蜻蛉かな

渡辺誠一郎

句集「赫赫」

出撃撃滅という激しい言葉に一寸驚く。太平洋戦争当時の練習機として、機体を赤く塗った複葉飛行機があつた。戦前の空を蜻蛉のように軽やかに飛んでいた二枚翅のプロペラ機は、子供の頃から見慣れてきた。そこへ突如現れたアメリカのボーイングB・29戦略爆撃機は、巨大な怪鳥のように怖ろしかった。掲句は、そんなこととは別に、楽しみに飛び回っている蜻蛉達なのだろう。しかし、世界情勢は微妙で、何時大規模な国際紛争が起きるか判らない。蜻蛉の空に、じんわりと不安がきざしてくる。

永き日や巨船静かに沈むごと

誠一郎

「戦艦大和ノ最後」を読んだ時の衝撃は忘れ難い。

超弩級不沈艦といわれた「大和」は、昭和二十年、激烈な戦いの末、沖縄の海に轟沈した。海を漂流して九死に一生を得た吉田満少尉は、この壮絶凄惨な虚しい戦のことを書き残さねばならなかったであろう。

掲句はあくまでも、うつとりするような永き日のイメージである。豪華客船だろうか、地球そのものか、ゆっくりと傾き沈んでいく。永き日の比喩としては特異な感覚で、幻影から解き放たれていくような特別な時間が流れる。